－所蔵作品紹介－

板津　邦夫　ITAZU Kunio

風のなかの彫刻

かぜのなかのちょうこく

作品データはこちら

板津邦夫（1931～）は道北地域に在住する代表的な木彫家の一人で、土俗的な雰囲気の漂う抽象彫刻に長年とり組んでいます。昭和26年に入学した東京芸術大学では石井鶴三に師事し、専攻科を修了したのち帰札していますが、昭和36年に道教育大学旭川分校の教師として旭川に赴任し、以来この地で制作活動を続けています。発表の舞台としては、道展をはじめ、自由美術協会に出品を続け、昭和38年に自由美術賞を受賞しています。道内でも、北海道秀作美術展や北海道現代美術展に連続して選抜され、昭和55年の第３回北海道現代美術展では優秀賞を受賞するなど木彫家として確固たる地歩を築きつつあるといえるでしょう。

この作品は、同氏が東京ではじめて個展を開いたときに出品したものです。題名が「風の中の彫刻」となっているのは、それが、海岸の砂浜の上に設置され、浜風がそれを吹き抜けていくような情景を想像してのことだそうです。作品にあけられているいくつかの丸い穴は、その海風を通すことによってあたかも美しい音色を響かせるような、そういった一種の特殊な楽器のようにみえてきます。

材質は楡（にれ＝エルム）で、大きな木一本から彫り出し、表面はアスファルト塗装したもので、そういったマテリアルが重厚な感じを与える一方で、その抽象的なフォルムは、どこかやさしいユーモアを奏でています。

旭川美術館だより「氷華」No.４（1983.12発行）「所蔵作品から」より